



第 58 回 「電車をデザインする仕事」の言葉

水戸岡鋭治著、「電車をデザインする仕事」（日本能率協会マネージメントセンター、2012 年 11 月）は鉄道や公共施設のデザインに携わってきた著者が自身の仕事及び仕事に対する考え方を紹介した興味深い書籍です。特に鉄道のデザインでは、JR 九州の特急「ゆふいんの森」、新幹線「つばめ」、クルーズトレイン「ななつ星 in 九州」など、斬新なデザインで人気の高い車両を多く手掛けています。著者の携わるデザインと私の基礎研究とでは仕事の内容は異なるものの、仕事に取り組む姿勢、考え方などにはいくつか共通点があることがわかりました。それらについて以下に紹介します。

デザインではまずアイデアを出し、その実現がコスト的に難しい場合、どうすれば実現可能かを考えるのだそうです。一方、基礎研究では実現のための「実験方法」や「解析方法」を考えます。しかし著者が指摘するように「夢を持って知恵を出す」ことが求められるのはデザイン、基礎研究に共通です。

デザインに対する著者の姿勢は「ナンバーワンでなくオンリーワンを作ろう」ということでした。これはまさに基礎研究にも言えます。他人と同じような研究や流行している研究に飛びつき、追いつけ追い越せの競争をしてナンバーワンになるのではなく、他にはないユニークな研究テーマを見つけ、オンリーワンの研究するのが大事です。研究には独創性が必須ですから。このようなオンリーワンのデザインの発想の原点は、「あったらいいな」を形にするということだそうです。基礎研究でも、「こんな研究ができたらいいな」を形にすることに他なりません。要するにこれは wants 型の研究です（「wants」型については第 3 回忘れえぬ言葉「本居宣長の言葉」をご参照下さい）。

戦後の鉄道のデザインは欧米の方法をそのまま取り入れていたので、著者は出来上がったものに対し妙な心地悪さを感じていたそうです。本当は日本人がもつ「和」の様式の上に「洋」の様式を重ね合わせればよかったのですが、現実には逆だったからです。そこで著者はこの逆転現象を解消するために知恵を絞り、その結果、心地良い鉄道が実現し、それらは多くの利用者から支持されました。基礎研究もまさに同じですね。「洋」の様式に追随する研究がいかに多いことか。研究者自身の発想、たとえば上記の wants 型の研究は希少です。

著者は以上のような考え方にに基づき、長年にわたり努力をしてきました。最近ではそれが実を結び、素晴らしい鉄道を次々にデザインする機会を与えられています。著者は「常に努力して勤勉に働いていれば、必ずチャンスが来て良い仕事ができるはず、チャンスを与えてくれる人が現れるはず」と述べ、これを「フェアプレーの精神」と名付けています。基礎研究でも同様ですね。たとえば wants 型の研究は初期のころは誰にも理解されず、評価もされませんが、努力して勤勉に研究を続けていれば、やがて心ある人の目に留まり、研究が大きく発展するはずですが、その研究をあきらめ止めてしまった時点で「失敗」となりますが、継続している限り「失敗」はありません。まさに「継続は力」ですね。

本書のまとめとして著者は、デザイナーのなすべき仕事は「未だかつて無いものをつくること」と主張し

ています。それは「既成概念を壊し、より豊かな人・事・物をつくって次の世代に残していく」ことだそうです。基礎研究でもこれと同じことが言えます。すなわちそれは「既成概念を壊すような独創的研究を行い、次の世代のヒントになるような結果を残していく」ことに他なりません。